

グローバルヘルス大阪宣言 2020

(OSAKA Declaration at Joint Congress on Global Health 2020)

2020年11月1日

グローバルヘルス合同大会 2020

第 61 回日本熱帯医学会大会 大会長

金子 明 (大阪市立大学)

第 35 回日本国際保健医療学会学術大会 大会長

中村 安秀 (甲南女子大学・日本 WHO 協会)

第 24 回日本渡航医学会学術集会 大会長

南谷 かおり (りんくう総合医療センター)

第 5 回国際臨床医学会学術集会 大会長

中田 研 (大阪大学)

日本ではじめて、異なる背景をもつ4つの学会が集うという記念すべき「グローバルヘルス合同大会 2020」において、第 61 回日本熱帯医学会大会、第 35 回日本国際保健医療学会学術大会、第 24 回日本渡航医学会学術集会、第 5 回国際臨床医学会学術集会を代表して、私たちは、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の影響下にある世界のすべての人びとの健康と幸福 (health and well-being) を願い、グローバルヘルスの発展に寄与するために大阪宣言を策定する。

2020年1月30日、世界保健機関 (WHO) が「国際的に懸念される公衆衛生上の緊急事態」(Public Health Emergency of International Concern: PHEIC) を発令したとき、COVID-19 の世界の感染者数 7,818 人、死者 170 人であった。そのうち、中国以外では、わずか 18 か国 82 人の感染者数が報告されていた。

COVID-19 はいま (2020年10月25日現在・WHO 報告)、全世界で約 4,250 万人の累計感染者数、約 114 万人を超える死亡者数を呈し、後世に語り継がれるに違いない歴史的な感染症と私たちは真正面から対峙することになった。

日本国内および地球規模において、今後 COVID-19 がどのように変貌していくのか、やがてどのように収束し、そして終息しうるのか、将来このウイルスがどのような形で人類と共生することになるのか、まだまだ予測がつかない状況である。一方、感染症と人類の長い歴史から学ぶと、現在のような緊張感のある状態がいつまでも続くわけではなく、新たな生活・社会を受け入れていくことは自明である。

私たちは、以下の項目に合意し、大阪宣言として広く社会にアピールする。グローバルヘルスという学問分野が、COVID-19 を契機として、チャンプルー（混じりあう）という発想を活かし、学際的に展開することを願う。

国際協力

パンデミック（世界的大流行）になった COVID-19 は、もはや自国だけで解決することは困難である。仮に日本国内で感染を終息させることに成功しても、地球上に大きな流行地がある限り、感染対策を継続する必要がある。いまこそ、国際保健医療協力の質と量を拡充し、研究調査と実践活動の両面からグローバルヘルスに関する国際的な協力・交流を積極的に推進すべきである。

だれひとり取り残されない

「持続可能な開発目標（SDGs）」の理念に立ち返り、COVID-19 対策の実施にあたり、貧困、教育、労働、環境、ジェンダーなど学際的な視点から「だれひとり取り残されない」対策となるように万全の配慮を行うべきである。

感染症対策

過去 20 年間、国際社会は結核、HIV/AIDS、マラリアの 3 大感染症、さらには顧みられない熱帯病に真摯に向きあい、流行地における対策のスケールアップを加速させてきた。その解決の糸口が見えてきた矢先を COVID-19 パンデミックは直撃した。国際社会はこれら貧困に関連する疾患への闘いを止めてはならない。いま人類は新たな生活・社会における新たな統合戦略を見出していく必要がある。

非感染性疾患

感染症とともに、非感染性疾患（NCDs）は依然として大きなグローバルヘルスの課題である。とくに、NCDs の4大リスクの一つである身体不活動（physical inactivity）は、COVID-19による人と人との接触を避ける施策などにより顕著になっている。今後、NCDs やメンタルヘルスのリスクの上昇が危惧され、世界規模での注意深い観察と適切な対応が重要である。

国境を超えて

ウィズ・コロナの時代にあつて、国境を超える移動に困難を生じている外国人や日本人に対して、ひとりひとりの人権とニーズに配慮したきめ細かな対策を講じるべきである。

その上で、グローバルヘルスを地球規模で進めていくには、医療と健康において、言語、文化、宗教、信条の違いを越える社会的包摂（social inclusion）が重要である。各国の医療通訳サービスを含むグローバルな保健医療体制をより充実し、それぞれの国や地域の特色ある強みを生かしつつ、地球規模で相互に発展する仕組みづくりをめざす。

PHC と UHC

ポスト・コロナ時代において、新たな新興感染症が発生する蓋然性は非常に高い。その準備として、この半世紀の間に築きあげてきた保健医療に関する世界的な理念であるプライマリヘルスケア（PHC）とユニバーサル・ヘルス・カバレッジ（UHC）に真摯に向き合い取り組むべきである。

グローバルヘルス教育

COVID-19により、海外との往来が厳しく制限され、グローバルヘルスの教育研究の現場である中低所得国におけるフィールド活動ができなくなった。そのような状況にもかかわらず、グローバルヘルスに関心を寄せ、この分野で仕事したいという意欲にあふれる若い世代の方々がいることは誠に心強い。グローバルヘルス合同大会 2020 を契機に、グローバルヘルスに関するデジタル教材開発など、若い世代に向けた教育の提供に積極的に関わることは、学会の大きな社会的使命である。

以上